三十二話　火のでる玉と針千本

むかしばなっこ。

むかしむかしある所に、娘三人もった百姓があったど。そして沢田をつくって耕やして、田、植えてたど。田の草とるようになったどこで、毎日の日照りつづきで、水なくなったと、そこでおやじ、

「こりゃ。大変だ。稲、死ぬし、どしたらえかべか」としゃべっていたど。

毎朝、田さ、えってみて、なんぼしても、水、つかねえど。どうやしてもつかねえと。そこで、赤沼様という神さんに願かけだど。

「なんとかして、この田さ、水、つくようにしてくだい。なんでもおめえさんの言うこと聞くがら。」

としえったど。水、つくようにという願をかけたところで、次の朝ま、いって見たら、水ついていたど。そういうのだば、娘、嫁にけると赤沼様にしえったど。そうはしえってみたどこで、「どうしたら、えがべか。」と心配していたど。家さきて、どんとねて起きねえど。おやじが。

みんな困って次から次へと娘、きたど。一番さきに姉娘いったど。

「あな、あな。なして起きねえや。まんづままけえ。」

としえったど。

「うん。うがおれのいうこと、聞てければ起きるどもや。」

としえったど。姉娘

「なにや。」

と、しえったら、

「赤沼様さ、願かけだば、田さ、水つでらけ、赤沼様、嫁にけろというやつさ、うんとしえったのや。うがいってけねな。」

「それだば、なんぼしてもいけね。」

としえったど。

二番目、えったど。次のやつさもそうしえったどこで

「ほや、おれ、なんぼしてもいけね」

としえったど。

末娘えったど。

「なにや」としえったどこで、

「にゃ、赤沼様さ、願いかけたば、田さ、水つけてくださった。娘、嫁にけるつもりにしてきた。うがいってけねえな。」

としえったど。

「えぐ」

としえったど。

「いぐどもな、針千本さ、火のでる玉、かってけろ、へば、おれ、いぐがら。」

としえったど。

「かってけるども、かってけるども。へだらいってけろよ。」

とたのんだど。

なんたら火のでる玉だったのか。その玉と針千本かって送っていったど。

赤沼様は山で、その山に底のあぎゃ沼があったど。送っていったどころで、じゃ、口あけで待ってらけど。娘くると思って、そしたどこでなんぼ親でもおっかねえかったべし、にゃ娘だどもじゃ口あいでいたために、こりゃ、いまとってくわえると思って、

その沼さ、「どん」と玉なげて、針千本ぴゅっとちらして逃げてきたど。そしたば、沼、がたがたとにたって、じゃ、せつなくなってからもむために針ささったすべ。したどもじゃだおん。追っかけてきたど。

どんどんはせてくだりかけにきたば、としよったばさまいたけど。

「いま、じゃにとってくわえる。」としえったら、

「あらりゃ、これ着れ、これっ」

と自分がきていたゆらっとしたおばかわぬいでその娘さ、着しえだど。

「これきて、うが逃げろ、くだりかけに逃げていげ。」としえったど。

一の渡りの方さに逃げだど。逃げたど。逃げだどころで、じゃもあきらめだのが、追ってこねえかったど。

娘、杖ついておばかわきて、としよりに化けていったど。

どっとはらい。